

女声合唱によるシアター・ピース

『やっこらさのさ、トンカ・ジョン』

く北原白秋と三人の妻く

作・しままなぶ

作曲・寺嶋陸也

登場人物

- ・女たち（合唱）
- ・北原白秋
- ・トンカ・ジョン（少年白秋）
- ・俊子（一人目の妻）
- ・章子（二人目の妻）
- ・菊子（三人目の妻）
- ・シケ（白秋の母）

(初演情報) 2013年9月23日

川口総合文化センターリリア音楽ホール

『はるか』第六回演奏会にて

指揮・藤井 宏樹

ピアノ・寺嶋 陸也

合唱・はるか

北原 白秋 池上 リヨマ

トンカ・ジョン 田中 利佳

一人目の妻俊子 萩原 美城 (はるか団員)

二人目の妻章子 庄司 紀子 (はるか団員)

三人目の妻菊子 岡野 貴子 (はるか団員)

白秋の母シケ 渡辺 満奈津 (はるか団員)

演出・しま まなぶ

照明・林 高士

※この台本は初演時に実際に演じられたセリフを元に整理し直したものです。方言部分は、トンカ・ジョンを演じた田中利佳さん(福岡県出身)による修正をそのまま採用しています。

■暗闇の中から女たちの歌声が聞こえてくる

♪一、『夜』（思ひ出より）

夜は黒………銀箔の裏面の黒。

滑らかな瀉海の黒、

さうして芝居の下幕の黒、

幽霊の髪の黒。

夜は黒………ぬるぬると蛇の目が光り、

おはぐろの臭のいやらしく、

千金丹の鞆がうろつき、

黒猫がふわりとあるく………夜は黒。

夜は黒………おそろしい、忍びやかな盗人の黒、

定九郎の蛇目傘、

誰だか頸に觸るやうな、

力のない死に螢の翅のやうな。

夜は黒……………時計の数字の奇異な黒。
血潮のしたたる
生じろい鉄を持って
生膽取のさしのぞく夜。

夜は黒……………瞑つても瞑つても、
青い赤い無数の靈の落ちかかる夜。
耳鳴の底知れぬ夜。
暗い夜。
ひとりぼつちの夜。

夜……………夜……………夜……………

■ ジョン(少年)走ってくる。手にした魚籠から魚を取り出して地面に投げつけ、踏みつける。イライラしている様子で、
残りも勢いよく放り投げる。

ジョン 「おまえの世話にやならんていうたろうがっちゃ。算術なんて好かん…」

■ 小魚を踏みつけるジヨンを見て白秋がやってくる。

白秋 「おお、おお、乱暴な。胸びれを紅色に染めて恋に燃えたオスの、なんと無残な事よ…はあ(ため息)」

ジヨン 「釣られる方が悪いんじゃない」(もう一度踏みつける)

白秋 「うう！ 痛たたた…」(痛がってうずくまる)

ジヨン 「え？…えい！」

(痛がる白秋を横目で見ながら踏みつけた小魚を蹴飛ばす)

白秋 「ぐうあつ！」(胸を押さえて苦しんでいる)

ジヨン (さらに踏みつけて)「ほれほれ…」

白秋 「ドあああ…」(ますます苦しんでいる)

ジヨン (白秋と小魚を見比べて)「…おいちゃんだれねん？」

白秋 「この胸の痛みは小魚ごときのちっぽけなものではないぞ。恋の痛みと言うものを、少年よ、お前はまだ知るまい」

ジヨン 「人生に失敗ばした人？」

白秋 「第二詩集・思ひ出はあの上田敏せんせいにも驚くべき賛辞を賜った、文豪投票においては詩人の部第一位に選ばれた」(自慢げ、だがとてもつらそうに)

ジョン 「…やっぱり失敗したんだね」

白秋 「長い間耐え忍んでいたが、とうとう恋に堕ちたのだ。骨抜きにされたのだよ。ううう…」
(また苦しんでいる)

ジョン 「おれのお父さんも骨抜きにされたうち、女たちが噂しちよった。親子ほども離れとろう、金取りに来てすぐまた行かすばんで。最近帳場にもあまりおらんようになった。おれには店ば継げちちやかましいくせに!!」
(走り去る)

白秋 「いかにせむ……………」

やはらかに

眼も燃えて、

ああ君は

唇くちびるをさしあてたまふ。」

(『断章 五十』思ひ出 より)

♪二、『泣きにしは』（思ひ出より）

美はしき、そは兎とまれ、人妻よ。

ほのかにも唇くちふれて泣きにしは、

君ならじ、我ならじ、その一夜ひとよ。

青みゆく蠟ろうの火と月光と、

饴すえてゆく無花果と、日のかげと

瞬間たまゆらにほのぼのとくちつけて

消えにしを、落ちにしを、その一夜。

さるになど光ある御空より

君はまた香かを求め泣き給ふ。

あな、あはれ、その一夜、泣きにしは

君ならじ、そのかみのわが少女をとめ。

■両手を縛られた白秋が出てくる。救いようのない絶望の顔をしているが、地面に何かを見つけて、不意に笑いだす。おかしくてたまらない。塀の向こう側に少年がいる。

ジヨン 「おいちゃん、なんがおかしいと？」

白秋 「おお、その声はいつかの少年」

ジヨン 「なんがおかしいんかねえっちゃ」

白秋 「うれしや監獄ひとやにも花はありけり…。これ、御覧の通り（縛られた腕をあげて、、と言っても塀の向こうからでは見えまいが。許されぬ恋をして私は捕えられた。棄て身になって縋すがりついて来た女に抗えず、愚かな熱狂の埧るつぼの中（一切の智慧も理性も哀楽も焼け爛らして了つたのだよ）」

ジヨン 「…？… 要するに、女に溺れたということやろ。」

白秋 「ああ…、恋に抗う術を誰かおしえてくれ。」

かなしきは人間のみち牢獄ひとやみち馬車の軋きしみてゆく磔道こいしみち

（桐の花 より）

帯に縄をかけられ数珠つなぎになって、馬車から庭へ下ろされる時の事だ。最後にわたしが飛び降りようと身構えると、前のやつ（の尻がわが身を強く曳くのさ。面白い事に、悲しくて深く落ち込んでいた心が、この時ふいに戯けて、やつ（こらさのさ（という気になったのだよ。

やつ（こらさと飛んで下りれば吾妹子わがもこがいぢらしやじつと此方向こちいて居り…：… 俊子…：」

■両手をしばられた俊子が立つて白秋をじっと見ている。互いに目を合わせ、ほほ笑むが、涙が流れてくる。

♪三、『爪紅の花』（桐の花 より）

しみじみと涙して入る君とわれ監獄ひどやの庭の爪紅つまぐれの花

♪四、『接吻』（思ひ出 より）

※（幼き頃の体験。ジョンが誰か知らぬ女にふと抱きあげられ、唇を奪われる様子が描かれる）

臭におひのふかき女きて

身體からだも熱くすりよりぬ。

そのときそばの車百合

赤く逆上のぼせて、きらきらと

蜻蛉とんぼ動かず、風吹かず。

後退あとしざりつつ恐るれば

汗ばみし手はまた強く

つと抱きあげて接吻くちっけぬ。

くるしさ、つらさ、なつかしさ、

草は萎しおれて、きりぎりす

暑き夕日にはねかへる。

■大泣きしているジヨン。貧しい服装の白秋がいる。

白秋 「また会ったな少年よ！ 千駄ヶ谷から木挽町、蛸殻町、小田原、飯田河岸、新富座裏、三浦三崎へ。

小笠原へも渡ったぞ。それから千葉県真間、そして葛飾と転居を繰り返したにもかかわらず、またこうして会えるとは何と寄寓な……はっ！ もしやお前は借金取りの息子か？！」

ジヨン 「へ？」

白秋 「父を追いかけて、私を追いかけて……北原家には最早財産など無いのだ」（大慌て）

ジヨン 「……意味がわからん。」

白秋 「借金取りではないのだな。（胸をなでおろす。気を取り直し）少年よ、なぜ泣いている？」

ジヨン 「普通、それ先に聞かん？」

白秋 「何に向かって泣き叫んでいるのだ？」

ジヨン 「（気を取り直し）海に向かって、この大海だいかいに向かって！」

（波の音がする）

白秋 「??? わたしには、江戸川にしか見えんがなあ」

ジョン 「わあああ…(泣いている)」

白秋 「何事の物のあわれを感じずらむ大海の前に泣く童かも」

(「童子抄」より、『雲母集』)

■ 幼いジョンを抱いた母(シケ)が、シカ(ジョンの乳母)の棺の行くのを見ている。すすり泣く母。

母 「ジョン。ほら、しっかり見らんば…バンバンの行きなはるばい」

■ 白い棺が運ばれていく

母 「ジョンな、バンバンば死なしてしもうて…バンバンに礼もいわん先に死なしてしもうて…こんだあ、あたいを死なすとじゃなかるの。…すまなじゃったね、おシカしゃん…成仏してくだはれ…」

ジョン 「おれのチフスの熱がたい、看病してくれよったバンバンに移ってな、バンバンころっと死んでしまったんじゃと…おれのせいで…そして今度は母さんを…そう考えたら恐ろしくてしかたがないんじゃ」

白秋 「人間死のうと思っても簡単に死にはせん。あれほど辱められたわたしでも、いざ死のうと思うとむしろ生きることがわいてきたもんだ。今日食う米がなくて、米櫃の底の米粒を雀にくれてやっても、となりでにこにこ

している章子あやこと共にいる幸せよ」

ジヨン 「食うもんないのに雀に米をくれてやるとか？それをゆるしてやるとは、さすが、一緒に監獄へ入った程の仲の良さ」

白秋 「それは俊子のことだろう。俊子とは別れた。」

ジヨン 「別れた！監獄ば出て？」

白秋 「結婚した。」

ジヨン 「どっち？」

白秋 「結婚して、別れた。垂乳根たらちねの親とその子の愛妻はしづまと有るべきことか仲違なかがひたり…。」

■俊子が立っている。しゃれた佇まい。

俊子 「外に誰がかしてくれました」

白秋 「誰もが貸してくれなければ借りなきやあいんだ」

俊子 「あなたは、あたしに餓死せよというんですか。薬ものまず、血を吐いて死ねばいいというんですか」

白秋 「不浄な金を借りるくらいなら、その方がいい」

俊子 「（わーっと泣き出す）」

白秋 「俊子、もう、きみは貧乏暮らしががまん出来なくなっただ」

俊子 「ええ、もうほとんど、貧乏には愛想がつかましたわ」

白秋 「日のあるうちに出て行け」

■涙を流しながら出ていく俊子。白いパラソルを開き二階を見上げるが、白秋は見送ってはくれない。

♪五、『なつめ』（トンボの眼玉より）

なつめ
棗。棗。

あアか
赤い棗。

なつめ
盗んだ棗。

あつめ
この棗どうしやう。

食べれば怖い、こは

見せれば叱る。しか

棄てるは惜しい。を

鸚哥いんこにあげよ。

鸚哥いんこは逃げる。

鴉からすにあげよ、

鴉からすは睨む。にら

七面鳥しちめんてうにやつたれば、

怒おこつた怒おこつた、真赤まつかになつて怒おこつた。

怖い棗なつめ、

盗なづめんだ棗、

お手々ててに入れて、

袂たもとに入れて、

歸かへつて寝たら、

棗なつめがぶんぶん鳴り出した。

蜂はアチになつた、蜂はアチになつた、

棗なつめがいつばい螫さしに來た。

こすは なつめ
怖い棗、
こすは なつめ
怖い棗。

白秋 「今度の妻、章子は病身だが、幸に心は私と一緒に高い高い空のあなたを望んでみてくれる。而して私を信じ、私を愛し、ひたすら私を頼つてゐる。この妻は私と一緒にどんな苦難にでも堪えてくれるだらう。たとへ私が貧しくとも、先の日の妻のやうに義理人情を忘れて、あはれな浮世の虚栄に憧れ騒ぐ事もあるまい。」

ジョン 「ふん、エゴイスト」

白秋 「少年よ、貧しき事の本質を知っているか？」

ジョン 「知らんばい。おいちゃんみたいな人のことをなんつうかは知つちよるばい。この甲斐性なし！」
(ジョン 走り去る)

白秋 「おい、少年！ 待ちたまえ」

■ 実に質素な格好の章子がいる。

章子 「しーっ……」(見上げて耳を澄ます)

白秋 「(見上げて……)ほお、雀が屋根に。トトトン・トントン・トトトン。ははは、飯炊く臭いに雀も浮かれてるな」

章子 「まるでフェアリーテイルズの侏儒こびとでもダンスしてゐるやうですわね。」

白秋 「全く、軽く気取った足音だな。トトトン・トントン・トトトン」

■二人笑っている。

白秋 「しかし、こうして表現に苦しむばかりで、新しい歌も作らずでは餓えるばかりだ。君もやせてしまった」

章子 「大丈夫よ。いよいよよとなれば、こんなにあなたがかわいがっている雀が一粒ずつお米を運んできてくれますわ、きつとそうよ」

白秋 「章子……」

♪六、『夕焼とんぼ』(トンボの眼玉より)

おほ 大きな、赤い蟹が出て、

あぐさ 藺草をチヨッキリちよぎります。

あぐさ 藺草の中から火が燃えて、

とんぼ その火が蜻蛉に燃えついた。

とんぼ 蜻蛉は逃げても逃げきれぬ、

唐黍畑たうきびたけに逃にげて來くる、
唐黍あたまの頭あこが紅あかなつた。
蓼たでの花はアなに飛ひんで來くる、
蓼はなの花はなにも火ひがついた。
野川のがわの薄すすきに留とらまつた、
薄すすきの穂ほさきも火ひになつた。
お庭にはの鶏頭けいとうにやすみませう、
鶏頭たすもいづばい火事くわじになる。
助たすけて下くだされ焼やけ死しぬる、
蜻蛉とんぼは藺草あぐさに縋すがりつく。
蜻蛉めだまの眼玉めだまは圓まるごころ、
くるくる廻まはせば山やまが見みえ、
山さかの中から猿さるがで出でて、
あつち向むいちちや、赤あかんべ、
こつち向むいちちや、赤あかんべ。

■ ジョン、本を開いて読んでいる。そこへ、着物は着崩れて、髪もボサボサの白秋がやってくる。

白秋はしくしくと泣いている。

ジョン 「どげんしたとね、おいちゃん。…奥さんに逃げられたんやろ」

白秋 「うう(涙をこらえ)…違う、違うぞ…逃がしてやったのだ」

ジョン 「やっぱり逃げられたんやん」

白秋 「洋館新設の地鎮祭兼園遊会は、確かに派手すぎたかもしれぬ。酒に浮かれたのも確かだ…しかし、
章子の^{かなえ}大狂乱も仕方のない事だったのだ。わたしも、章子を責め、侮辱する鼎君ら言葉には我慢がな
らなかつた。」

ジョン 「取っ組み合い？ お、銀やんま！」

(銀やんまにそろりそろりと近づいていく)

白秋 「そこにいたみんなを巻き込んで鉄拳飛び交う大騒動、わたしもすっかり頭に血が上ってよく覚えていない
のだが、気がつけば、弟の徹雄は血を流して倒れ、…章子は疾走。」

(帽子を手に、銀やんまに近づくとジョン。帽子を振り上げ)

ジョン 「逃がした！」

白秋 「ぐぐぐ…まさか、池田くんと…。章子は新しい恋の道に進んでいったのだ。ううう…」

ジョン 「かつて人妻を奪った男が、今度は妻を奪われ、悔し涙……」（飛んで行った銀やんまを目で追っている）

白秋 「悔しくて泣くのではない。章子の行く末を案じて涙がこぼれるのだ。恋より恋へ移つてやまざる章子の生涯……ああ、章子、あなたのこれからを思うと私は慄然とします。」

ジョン 「ろくでなし〜！」

白秋 「は？章子？わたし？」

ジョン 「銀やんま！」

白秋 「ああ。。。。」

ジョン 「去ってしまうのは人だけやなくて、大切な何かも一緒におらんことになってしまう気がする。」

白秋 （ジョンの言葉に共感するようにうなずき）

「銀のやんまのろくでなし〜！」

（ジョン、読書に戻る。）

白秋 「何を読んでいる」

ジョン 「雨月物語」

白秋 「ほお、それは面白いだろう」

ジョン 「うん、三国志も西遊記も面白かったっちゃけど、雨月物語は格別ばい。何度読んでもゾクゾクするき。おいちゃんも本を読むと？」

白秋 「ああ、まあ、読むし、それに書く」

ジョン 「おいちゃん作家ね？」

白秋 「歌を詠み、詩を書く。童謡も楽しいぞ。」

(ジョン、じっと白秋を見ている。羨望の眼差し)

白秋 「少年よ。お前も書きたいのか？」

(ジョン、大きく頷く)

■月あかりが静かに照らしている。ピアノの音が聞こえてくる。白秋がゆっくりと歩いている。

♪七、『月夜の家』 (兔の電報 より)

壊れたピアノに

壊れ椅子、

誰が月夜に弾いててか、

誰もみもせず、音ばかり。

白い木槿に

青硝子、

母様もしかと来て見ても、

中には月のかげばかり。

ときどき光る

眼が二つ、

黒い女猫の眼の玉か、

それともピアノの金の錠。

壊れたピアノに
壊れ椅子、
誰が弾くやら、泣くのやら、
部屋には月のかげばかり。

空には七色

月の暈、

いつまで照るやら、照らぬやら、
壊れたピアノの音ばかり。

■曲が終わるとジョンがやって来る

ジョン 「おいちゃん！」

白秋 「おお、少年よ」

ジョン 「これ！」（懐から本を出し、掲げる）

白秋 「それは？」

ジヨン 「若菜集」

白秋 「島崎藤村」

ジヨン 「うん。」

まだあげ初めし前髪その
林檎りんごのもとに見えしとき
前にさしたる花櫛はなぐしの
花ある君と思ひけり」

白秋 「やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅うすくれなゐの秋の実みに
人こひ初めしはじめなり

：わたしも若いころ夢中だった」

ジヨン 「ああ、こげな風に書けたらいいっちゃけど」

白秋 「書けるさ。お前の心の中には、早く出たいと、言葉たちが騒いでいるのだろう、ちんからちんから踊っているのだう」

ジョン 「…おやじには怒鳴られる。きさん歌などまだやっちよるのかっち」

白秋 「やめるのか」

ジョン 「やめるわけなか、俺は自分のやりたいようにやる。自分の道ば進む」

白秋 「少年よ、わたしはお前のその目を知っているぞ」

(ジョン、白秋じっと見つめ合う。)

白秋 「ジョン、お前は、トンカ・ジョン」

ジョン 「おいちゃんは？」

白秋 「北原、白秋」

ジョン 「俺がくじで引き当てた名前」

白秋 「ははは…」

ジヨン 「あはは…」

(白秋、不意に空に目を向け)

白秋 「虹だ。虹だ。」

ジヨン 「わあ、二重ふたえの虹ばい」

白秋 「隆太郎よ。ああ、あれはおまえのものだ。」

(白秋、虹へ向かって手をあげる)

ジヨン 「隆太郎？」

白秋 「息子だよ。菊子はりっぱな子を産んでくれた。」

ジヨン 「菊子？」

白秋 「妻だ」

ジヨン 「さ、三人目？…何人もらえば気が済むと？」

白秋

「菊子はな、優しいのだよ。(デレデレ)料理が得意で、どれもおいしい。私の作品を理解し、共感し、励ましてくれる。菊子がいなかったら私はだめになっていたかもしれない。菊子がない生活など、もう考えられない……(いつの間にかジョーンがいない)おい、ジョン！トンカ・ジョン。ジョン……、そうだ、いつでも会えるんだった」
(胸に手を当てる)

■隆太郎を抱いた菊子が手を振っている。

白秋

「おおい、菊子」

♪八、

『二重虹』 (二重虹より)

坊やよ、坊やよ、御存じか。
今朝がた、七いろ、二重虹。

お家の真上の二重虹、
父さん遠くで見えました。

旅から、やつとやつと、久しぶり、
坊やの顔見に歸る途。

向うむかの山やままで来きて見みたら、
お家うちの青空あそら、二重虹。

坊ぼくやも目めざめか、歌うたうてか、
いそいそ歸かへると飛とんで来きた。

坊ぼくやよ、坊ぼくやよ、御存ごぞんじか。
今朝けさがた、七なないろ、二重虹ふたえにじ。

お家うちの赤屋根あかやね、二重虹、
父ちちさん涙なみだがながれてた。

♪九、

『言葉』

(祭の笛

より)

ことば
言葉はかはい。
きれい
まもの
綺麗な魔物、

小さな魔物、
生きてる魔物。
ひとつひとつかはい。

言葉は跳ねる。
つまめば逃げる。
てんと蟲のやうに、
水馬のやうに。
ひとつひとつ跳ねる。

言葉は響く。
葦の葉の笛よ、
鈴蟲、小蟲、
チツクタツク時計、
ひとつひとつ響く。

言葉は光る。
プリズムの影よ。

花火や、螢、
とんぼの眼玉、
ひとつひとつ光る。

言葉はかをる。
紅薔薇、野茨、
山椒の木、
山椒の木の芽、
牝山羊のお乳、
ひとつひとつかをる。

言葉は染みる。
お蜜や、苺、
青梅、山葵、
苦い苦い薬。
ひとつひとつ染みる。

言葉を綴ろ。
珠数だま、むくろんじ、

あつか つかき
紅い紅い椿、
げんげの花環。
ひとつひとつ綴ろ。

言葉はをどる。
不思議な小人、
三角帽の小人、
ちんから、ちんから、囃して
ひとつひとつ踊る。

■ ゆったりと踊る女たちの幻想的なシルエット、溶暗

(終)

【出典・参考文献】

・ 白秋全集(岩波書店)、邪宗門、思ひ出、トンボの眼玉、雀の生活、白秋詩抄(岩波書店)、白秋抒情詩抄(岩波書店)、白秋童話集(あかね書房)、日本新童謡集(アルス)、まざあ・ぐうす、作曲白秋童謡集(改造文庫)
・ ここ過ぎてく白秋と三人の妻(瀬戸内晴美)、北原白秋(三木卓)、北原白秋(横尾文子)、沈黙する白秋(北原東代)、トンカ・ジョンの旅立ち(森崎和江)、白秋(高貝弘也)、北原白秋研究ノートI(久保節男)、評伝北原白秋(藪田義雄)、白秋論資料考(西本秋夫)、北原白秋うたと言葉と(高野公彦・三田カルチャーラジオテキスト)、女人追想く北原白秋夫人・江口章子の生涯(杉山宮子)、北原白秋くその青春と風土(松永伍一)